

山王の地名の起源

現在、私たちの住む山王はもとは新井宿という村の一小字でした。その地名の起源は、日枝神社の旧称である山王権現の山王がすなわち地名となつたのです。

それでは一体、いつごろから山王と呼ばれていたのでしょうか。はつきり文献などにあらわれているのは、例えば「新版大森風土記」に「延宝年間（約三百年前）に山王村と呼んだ事実がある」と記されている。それは、「大井の光福寺の過去帳の権左衛門（日枝神社が名主酒井権左衛門の庭内社であったこと）の身内欄に新井宿山王村とあり、さらに延宝五年丁巳正月十一日欄に宗円信士 新井宿山王村 俗名権左衛門と記録されている」と書かれています（「大田区地名考」——大田区役所広報室編から）。

これらを考慮すると「山王の名は延宝のころ（三百年前）すでに山王村と呼んだような事実がある」（「大森区史」）ということになります。また慶長年間の「大井村検地水帳」

（検地とは実地に田畠を検竿^{けんざお}で測つて上中下を定め石高をきめること）の写しに、山王ばし（橋）と書かれている部分があります。山王橋というのは、後楽園ボウリング場前の、大井と山王の境を流れる川（品川用水）にかけてある橋です。現在の橋は昭和五年に改修されたものですが、すでに三百余年も前にこの橋は山王橋といわれていた事実がわかります。まさに人に歴史あり、橋にも歴史あります。恐らく、この辺りの地名は、そのころすでに山王といわれていたものと思われます。

池上道

池上道——すなわち、今の池上バス通り、平間街道といい、古の東海道の本道でありました。この道は奥州街道とも相州鎌倉街道とも呼ばれた時代があつたのです。東海道が今のように海沿いになつたのは、慶長十四年（一六〇九）ごろで、徳川家康が江戸入府後、街道を整備して海沿いの道を道幅六間と定めたのです。

さて、この池上道の歴史は古く、「延喜式」駅馬の条に、武藏国店屋、小高、大井（新井）、豊島とあり、各駅馬十匹を配され、駅路は奥州街道、すなわち現在の池上道で、足柄越より店屋、小高（丸子渡し）を渡つて、あらいが崎（新井の宿）を経て豊島にかかる。これが大化年間（六四五～六五〇）から以後の駅馬の順路でした。延喜年間の図を見ますとその当時も現在も、この山王周辺の地形は変わらず、街道も今と同じようなのであります。図の左の方は足柄越道と記入され、右の方は陸奥道と書かれているので、当時の奥州街道だたことがしのばれます。このころ（延喜年間～九〇一～九二二）は大井の光福寺（大井第一小学校裏にある）は、神宮寺といっていました。そして武藏国司中納言豊人の館がその近くにありました。豊人というのは、石川麻呂の孫で国司として武藏に下向し大井に一時居館を構えたと、古記録にあり、その場所は今の鹿島神社の近くではないかと思われます。

日本武尊やまとたけるのみことも東夷征伐のとき、この奥州街道を通つたことでしょう。八幡太郎義家も源氏の軍勢を引き連れて、この街道を奥州征伐に通つたのです。

以前、八景坂のかたわらに義家鎧掛松というのがあつたと、いくつかの古書に記されています。鎌倉に幕府が成立すると、この道は鎌倉街道として重要な役割を果たします。

文明年間（約五百年前）の古書（「回國雜記」）に「芝浦より荒井（新井宿）に出で、丸子を経て鎌倉に向へり」とあるのは、すなわち池上道のことです。

新田神社に祭られている新田義興の一軍も、この道を通つて矢口の渡しに向かつたものでしそう。

江戸時代になると、東海道の本道は海辺に移つたので、この池上道は脇道となり、幅三間と定められたのです。古い検地帳によると、

「池上道 道幅三間

品川境より立会まで百九十九間半（中略）

田向（鹿島谷）より山王ばしまで二百五間。メ間数 千七八十八間半」となっています（「大井村名主大野家文書」から）。

江戸時代の文献にあらわれた池上道については、「池上街道の傍らに八幡太郎鎧掛の松といへる古株二本あり。此松、慶応年間まで一株残りしが、明治元年頃、新井宿村にて伐木して今はなし」（「南浦地名考」）、「八幡太郎鎧懸松同所高き所に在り、その来由をしらず、此所より海上眼下に八景あり」（「江戸砂子」）。「江戸砂子」という本は享保十七年、菊岡沾涼著）。「品川より池上道、この道筋新井より矢口の筋なり、一里塚榎一株残れり」（「江戸砂子」）。この「江戸砂子」が出たのが二百四十年ほど前ですから、今はこの一里塚もない。

また「江戸名所図会」に、「——上古の街道、品川より池上へ行く道。その道筋大井、荒藪（新井）池上、矢口と続きしなり。今も八景坂より西南池上へ行く道に、昔の一里塚榎一株残れり。又其の辺りの藪中に標の石、今も存せりとなり。延喜式大井伝馬の事証とすべし」とあります。「江戸名所図会」が出たのは天保七年ですから、江戸初期から池上街道という名で呼ばれていたのは間違いないことです。山王付近は将軍家の御狩場であつたので、度々將軍のお越しがありました。

「享保十年己七月二三日

御成 御休止 八幡社

大井、新井宿、雲雀野、百匁玉鉄砲おためし、お弓、お馬責なさる」

（「大野家文書」から）

八代將軍吉宗のころである。八幡太郎義家が、また將軍吉宗が、馬上豊かに、この池上道を歩んだ姿を想像してください。私たちも歴史をしのんでこの道を歩いてみましよう。

大森山王と周辺の歴史を探る	
頒価	二二〇〇円
初版発行	昭和六十二年三月
三版発行	平成三年三月
著者	魚銀主人 後藤浅次郎
〒 143	東京都大田区山王一一十三一八
電話	〇三一三七七一一九七九
編集・制作	朝日新聞東京本社 朝日出版サービス
〒 104-111	東京都中央区築地五—三—一二
電話	〇三一三四五—〇二三一(代)
印刷	大日本印刷株式会社